

ブリックマンの「ミケランジェロ批評史」を読む

前川 誠 郎

本書の原標題は *Michelangelo / vom Ruhme seines Genius in fünf Jahrhunderten / von Prof. Dr. A. E. Brinckmann / Hofmann & Campe Verlag • Hamburg 1944* である。即ち「五世紀間に於ける天才の名聲について」と云う副題が示す様にミケランジェロの生前から殆ぼ現代に到るまでの彼を繞る批評或は評價の變遷の大綱を辿つたもので、著者自ら「小冊子」と呼んでいる如くこれは一九三八年ブリックマンの創刊した *Geistiges Europa / Bücher über geistige Beziehung europäischer Nationen* 即ち「歐洲諸國民の精神的關連の書」と副題された「精神的歐羅巴」なる叢書中の一冊として世に出たものである。嘗て伯林大學で親しくブリックマンに師事された徳川義寛氏は既に昭和十九年同じくこの叢書中の一冊と思はれる「諸國民の精神」 *Geist der Nationen* に觸れてブリックマンが夙にヴァレリの汎地中海文化の思想に共鳴し歐洲文化圏と云うことを考へていたと述べてをられる（徳川義寛著「獨逸の美術史家」一二二—一二三頁）。私はその詳しくを未だ知り得ないのが残念である。本書は百頁足らずの小冊子である爲に記述が往々簡略に過ぎ且つ思想的な誇張せられた行文は時に不必要な

ブリックマンの「ミケランジェロ批評史」を読む

までに難澁で理解に苦しまされるものの、一美術家に關する批評史と言ふ體際は類書の寡い點で珍らしく又た扱方に依つては大きな勞作へとも發展し得べき要素を多分に含んでいると言へる。私が興味を惹かれたのは十七、八世紀の佛國文獻が比較的詳しく引用されて當時のミケランジェロ攻撃の模様を素描してある點であつた。但し著者がその原因を専ら佛人の理性的性情にのみ求めているのは甚だ物足りない。それらの不評の背景に在るアカデミー思想と更にアカデミー成立の経緯とを僅かでも辿るならば我々は意外にもミケランジェロその人の大きな存在に衝き當つて了う。そのことを以下に少し書いてみたいと思ふのである。

○

本書に依れば十七、八世紀の佛國のミケランジェロ批判は次の如くである。即ち十七世紀後半の古典主義の下では彼は理性に徹底的に背反し規則の代りに恣意を導入し健全な人間悟性を侮辱したと考へられた。例へば一六六二年 *Idee de la Perfection de la Peinture*（繪畫の完全について）を著したロラン・フレアール・ド・シャムブレエ Roy-

Lland Fréart de Chanbray はミケランジェロをヘラファエロより評判こそ大きいが仕事は迥かに劣り美術の一切の規則を足下に踏みにおつた《處の le mauvais Ange de la peinture (繪畫の惡天使)》と呼び、その「最後の審判」は *raison* (理性) と *convenance* (良識) とに反したものと考へた。併し彼もミケランジェロが《人體の輪廓均衡の正確と云う點で良き素描家》であることはこれを認めていた。デュフレノフ *Dufrenoy*、シャントルウ *Chancelou*、フェリブアン *Félibien* なども殆ぼ同様な見解を示している。斯る惡罵が洪水の如く汎濫した當時に在つて不思議なことに現在ルーヴルに藏せられる二體の「奴隸」だけは《巨匠の完璧の彫刻》として或はシャントルウに或はラ・フォンテーヌに依つて絶讃されたが、これは當時の所有者であつたりシユリウへの阿諛に他ならない。次いで啓蒙主義の時代へ入ると此の調子が漸く緩和されて來る。併しヴォットオやブーシェの力を以てしても斯るアカデミックな理性的美術觀を打破することは覺束なかつた。此頃から史的發展に關する省察が萌し始めて古典的規範の無時間的妥當性への信仰が次第に搖ぎミケランジェロにもその *libertinage* (恣意) を認めようとする方向へ傾いて來るが猶且彼等は *ordre* (秩序) と *mesure* (節度) とに關連させてのみ恣意を許容する。従つてミケランジェロは彼らに *licence* (放縱) としか思へない。斯かる考へを反映して當時の批評はミケランジェロを天才と認めつゝも善惡何れとも決して兼ねる状態に置かれた不快感を特色としている。彼らは理解しても同意出來ず、外界に支點が出來て自己の傳統が一舉に覆へされることを怖れた。《精神の廣さ、想像力の強さ、魂の活動》と天才を定義した

ディドロ *Diderot* もミケランジェロについて《その素描は正確なるも無味、その繪畫は活氣あるも魔力なし。莊嚴な彫刻作家。第一流の建築家》と判断する。ミケランジェロは又た *Cornille de la peinture* (繪畫のコルネーユ) と呼ばれることも度々であつたが、それは此の兩者に於て高貴なものへの英雄的な併し餘りに張りつめた上昇が等しく感ぜられ、それは人を強く感動させても美的満足を残すことが寡いからである。ブーシェがミケランジェロを *bossu* (畸型) と酷評したのは、その弟子のフラゴナルが伊太利へ赴くに際しヘラファエロやミケランジェロと言つた連中を眞とも取上げるなら君は *garçon de chu* (お目出たい奴) になつて了うぞ》と警告したことから分る様に、所謂アカデミー式の美術觀とは全く別に當時絶頂に達していたフランス・ロココのぎり／＼にまで秤り盡された調和の世界を毀されはせぬかとの怖れからであつた。彼はラファエロを *faté* (色あせた) と言つている。レニングラード(昔の聖ペテルスブルク)の「彼得大帝騎馬像」の作者であるエチェンヌ・モーリス・ファルコネ *E. M. Falconet* (一七七一—一七九二) が示した殆ど憎惡に近いミケランジェロ批判は寧ろ兩者の作風の相似の故に我らを驚かせるが、それは彼が一個の世紀末人であつたことから説明が出來よう。彼の晩年既に巴里ではアベ・ド・オーシエユルヌ *Abbé de Houcheorne* の「ミケランジェロ論」(一七八三) が現れシステイン天井畫に於て《その想像力の炎と天才の強さ》を賞讃しているのである。——以上がブリックマンの説く處の主要である(本書二一—三二頁)。我々はこれに依つて十七世紀中葉以降の佛國に於て所謂理性的美術觀が如何に強大な根を張りそして其

れが揺らぐ迄に如何程の長い歳月を要したかを知ることが出来る。其處にはプリンクマンの強調する様に佛人の特性である理性的性情が大きく働いたことも確かである。併し乍ら其の理性的美術觀とは實は佛國民の美術觀であるよりも更に幾層倍もアカデミーのそれなのである。而もその淵源は丁度一世紀以前の伊太利に在つた。それは恰も大ミケランジェロの晩年に當る。歐洲繪畫は殆ぼその頃を轉機として着實に色彩主義への道を進り始めるのであるが、これと全く方向を逆にした古典的理性的美術觀が（假令理論の上だけではあるにせよ）時を同じくして明確な形式を整へ、今後約三百年に亘つて歐洲の美術界に理論と實際との大きな乖離を惹起しつゝ存続して行つた理由こそは人の最も不思議とする處であるに違いない。問題は偶々古典期の佛國に於て如何にミケランジェロが不評であつたかに在るのではなく、その悪いとされた理由の由來する處に在る。これを理解する爲に我々は巨匠の晩年から死後へ掛けての事情を少し考へてみなければならぬ。

○
ヴァサーリの列傳を讀む人はミケランジェロ傳に到つて作者の意氣込みが他の美術家の事蹟を記す場合と著しく異つてゐることに氣付くであらう。それは既に第三部（十六世紀）の序文に於ても伺へる處であるがミケランジェロはヴァサーリにとつて單に師であるのみならず總ての美術家を批判する場合の尺度であり一切の古人を凌ぎ當代美術の精華を致した神人であつた。彼の初版（一五五〇）が出た三年後に文士コンデイヴィのミケランジェロ傳が書かれ而もその背後には巨匠自身が關係していると言うので、文人對畫人の對抗意識も手傳つてか

プリンクマンの「ミケランジェロ批評史」を讀む

ヴァサーリは師の没後四年目（一五六六）に列傳の新版を出した際特にミケランジェロ傳だけは別刷にしてアレッサンドロ・デ・メヂチ公に捧呈すると言ふ念の入れ方であつた。その中で彼は生前巨匠が彼に寄越した多數の書翰を公開し自分が如何に師と親密な關係に在つたかを誇示すると共に、師の風姿外見等を記すに當つては競争相手たるコンデイヴィの記述を無斷借用して憚る色がなかつた。斯の如く此の巨匠に對しその在世中より伊太利人が争つて天上的な地位を與へたと言ふことの中にこそ爾來伊太利でのミケランジェロ研究が彼を唯だ英雄視するに留まつて何らの本格的進歩をも見せなかつた理由であるとプリンクマンは言う（本書一四頁）。斯る熱狂は勿論巨匠の餘りにも超人的な仕事と生涯とに原因するものであつたことは間違ない。併し其處から生ずる純粹な驚異や感激だけがヴァサーリたちをしてあの頌徳表を書かせたのであるとは受取り難い。ヴァサーリのミケランジェロ傳を讀んだ誰しもが容易に氣付く様にあの傳記の中に挿入された多數の逸話にはミケランジェロが如何に傲岸な人間であり又貴顯の不當不遜な壓迫に對しても彼が如何に昂然として屈しなかつたかを語つたものが寡くない、否むしろそれが殊更に強調されてすらゐるのである。プリンクマンも此の點を指摘して其等の逸話が希臘のアペルレス説話の燒直してあることを述べている（十二頁）。名著「美術批評の成立」の中でアルベルト・ドレズドナは言う、**「ミケランジェロが自己の爲に成就したことは即ち爾餘の一切の美術家の爲でもあつた。彼ら美術家の全社會は彼に依つて強力に高められた。その晩年同業者たちは彼らを妖怪の如く威壓する此の老人を痛く罵倒したとは言へ、彼らは**

總て自らが小ミケランジェロとして認められ取扱はれることを要求したのであつた》と (Alb. Dresner: Die Entstehung der Kunstkritik, 1915, S. 88 f.). 絢爛たるルネッサンス美術史の背後には美術家の身分解放運動と言ふ一面が隠れている。これは彼ら自身の覺醒と教養とに依つてのみ達成せらる可き問題であつたが此處にも亦たアルベルティ、レオナルド、ミケランジェロと言つた天才たちの力が大きく働らかねばならなかつた。就中ミケランジェロの貢獻は決定的であつた。彼以後美術家の生活と地位とは王侯にも比すべきものになつたとはヴァサリ自家の認める處であり、又た羅馬では既に巨匠の晩年に於て著名畫人のアトリエが名所になりつゝあつたと謂う (Dresner S. 84 f.)。コンディヴィと本家争ひをしてまでもヴァサリが先師の頌徳に奮闘した理由は斯う考へて始め解けて來るのである。彼らは最早や職人の境涯を遠く離脱したとの自覺を持つ。美術は自由學藝 *ars liberalis* の立派な一分科となつた。此處に當然嘗ての徒弟は學生として美術を學ぶことを欲し昔の組合組織は大學として美術を授けようとする氣運が生じて來る。事實ミケランジェロの死後三十五年して遂に羅馬には路加アカデミー (一五九九) が設立されたのであつた。これより先夙に寺院から離れつゝあつた美術は新しいパトロンとして貴顯富豪等の知識層を求め其れ等教養階級の要求に應じて素材を古代文學に仰ぐ必要に迫られていたのは周知の如くである。その方面の知識の缺乏は勢ひ美術家を文學者との接觸へ導きその忠告を聞くことに依つて美術批評家の發生と存在とを許そうとしていた。今後數世紀に亘つて歐洲の美術界又は知識層を長らく賑はせることなる「ラファエロ對ミケランジェロ」の

問題を始めて (一五五七) 提起したロドヴィコ・ドルチェヤ、又たミケランジェロと一戦して遂ひにシクステイナの天井裸像群に猿又を穿かせる苦澁を管めさせたピエトロ・アレティーノ等は何れも上記の事情から生れ來つた斯道の大先達なのである。ヴァサリの列傳中各處に顔を出すアレティーノに對し如何にヴァサリが親愛と尊敬の念を露はにしていることであらうか。而もそのアレティーノはミケランジェロに宛てた例の有名な強請狀 (一五四五) の初めに「貴下の「最後の審判」の美事な構成の中に私はラファエロの名高き優雅を認めた」と述べて暗に彼がラファエロを高く買つてゐることを仄めかせている (cf. Hermann Grimm: Michelangelo, Saffari-Ausg. 1949, S. 234)。又たドルチエがミケランジェロに繊細の缺如と畫中人物の單調とを責めて軍配をラファエロに擧げたとはブリンクマンもドレスドナアも共に傳へる處である (Brinckmann: S. 10, Dresner S. 88)。ラファエロを理想の美術家と崇める斯の如き文人たちの古典的嗜好は瞭かに當時の美術のバロック化的動向に逆行している。それにも拘らず一刻も早く中世以來の職人の身分を離脱しようとして熱望していた美術家は進んで其等文人に友好の手を差延べ彼らの言葉を以て自己の理論となし教養社會に受入れられんことを願つた。ロマツッオ G. P. Tomazzo の美術論 *Traffato* (1585) やアルメニーノ G. B. Armenino の教則 *Precepi* (1587) などがあるが、素より方便なのであるから實地の制作に何の拘束をも與へるものではなかつた。過去二世紀に及ぶ伊太利美術の輝しい傳統はそれ自身の力強い發展動機を持つてをり、急造の理論の到底能く支配する處ではなかつたのである。ヴェルフリーンに依れば一體ロマツッ

オの理論それ自體が決してバロック美術の動向と相容れないものではないとすら謂う (cf. H. Wölfflin: Renaissance & Barock 4. Aufl. S. 17)。其後約半世紀して佛國に移植された此のアカデミズムが爾來三世紀に亘つて所謂「青銅の巖」にも比較せられる強固な地盤を確立し得たのは國家權力を背景とするコルベールの庇護もさること乍ら、ブリンクマンの強調する佛人の理性的性情と共に、それまでの佛蘭西に見るに足るべき美術 (特に繪畫) 的傳統がなく一般に伊太利美術の崇拜が極めて顯著であつた事情を是非とも考へる必要がある。斯る好條件に恵まれて甫めてアカデミズムは其の本來の使命たる美術家の社會的地位向上の達成に最も強大な寄與をなすことが出來た。アカデミーの理

論を否定することは美術家自身の存在を否定するに均しかつた。寡くともその生存を極端な危険に曝すことであつた。ラファエロを揚げてミケランジェロを貶しめるのが即ち紳士の教養だとなれば此の掟を破るのは餘程の勇氣が要る。ブーシエに一本針を刺されて羅馬に行つたフラゴナール自身は何と言つたか。へミケランジェロの精力は私を怯えさせた。私は言ひ得ない感じを受けた。ラファエロの美しさを前にして私は落涙するまでに感動し鉛筆が手から落ちた程だつた》(本書三〇頁)。アカデミー設立の氣運に最も大きな刺激となつたミケランジェロが後世そのアカデミーから散々虐待されたのは皮肉である。